

「宗祖親鸞聖人御誕生 850 年・立教開宗 800 年」に憶う

## ご門徒を荘厳する慶讃法要を！

法要の荘厳のためにご門徒を利用するのではなく、ご門徒を荘厳するために法要は勤めるものである。というのが、あえぐように生きる私たちを「われら」と呼び共に生きられた親鸞聖人の精神であろう。仏法は、一番苦しんでいる人のためのものである。一番苦しんでいる人のところへ届くべき教えである。

仏教の精神は、現代福祉でいうところの「社会モデル」の精神である。たとえば、「うさぎとかめ」のかけっこでいうならば、ウサギはゴール前まで早く行って寝て待つのではなく、かめが無事にゴールするために障害物があれば取り除いて歩みやすくするのが、うさぎのすべきことである。仏教の精神である。

だがしかし、理屈ではわかるのではあるが、その実践となると難しい。

慶讃テーマである「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」に我が身が問われる時、「生まれたことの意味」をおもう時、私は宮沢賢治の「さそりのはなし」を思い出す。

あるところに大きなさそりがいて、小さな虫を殺して食べて生きていた。しかし、ある日イタチに見つかって食べられそうになり、井戸の中に逃げたはいいが、どうしても上がれないで溺れはじめた。その時、さそりは思った。「オレはいくつの命を取って食べたかわからない。それなのにイタチに食べられそうになった時、一生懸命に逃げた。それでとうとうこんなことになってしまった。どうしてオレはオレのからだをだまっておいてイタチにくれてやらなかったのだろう。そうしたらイタチも一日長く生き延びれただろうに。この次に生まれて来る時には、こんなにむなしく命を捨てずにみんなの幸せのために使いたい」と。

というものである。このお借りしているいのちをどのようにお返ししたらいいのか、慶讃法要へ向けて半歩でも実践の歩みを進めたい。

2021年1月 釋 則道（松岡雅則）